木下杢太郎全集

第九巻

木下李太郎全集 第九巻　第七回配本(全二十四巻)

一九八一年一一月一八日　発行

定価 三七〇〇円

著者　太田正雄

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六二四〇

印刷・三秀舎　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 太田元吉 1981　Printed in Japan

目　次

新藝術の先驅者――二科展評……一
文展の洋畫……一六
現代の藝術的意識……二五
平福百穗氏作「朝露」評……三九
批評家と「夜」と……四〇
浦上村事件……五四
「三人吉三」合評……六八
故小林清親翁の事……七〇
新年雜誌創作評……八三
道樂日記……九六
現代の歷史小說……一〇八

美術通信……一一三
立體派の繪畫……一四三
國民的文化の自覺とは何ぞや……一五三
新東洋趣味……一六三
文壇現狀論……一八七
最近美術界……一九〇
最近畫壇の推移……二〇三
三人吉三……二〇七
吉　林……二一〇
文華殿觀畫記……二一九
爲藤五郎に與ふ……二三九
北支那雜話……二四一
高其佩と朗世寧と……二五三
支那の陶器……二六七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

支那の劇……二七八
滿洲通信……二八四
滿洲通信拾遺……三七七
後　記……四二一

新藝術（ノイエ、クンスト）の先驅者——二科展評

二科會の繪畫展覽會は今三越呉服店の三階で開かれて居る。未だ好く西洋畫を味はふに慣れない人は、此處の列品を見て、極めて拙劣（まつ）い畫だと思ふかも知れない。林檎はどす青くしやちこばり、女の皮膚はブリキ細工のやうに硬く赤色なし、牛は牛とて麥藁細工のやうにふわふわしてゐる。或は廿年以前の油繪でもあるやうに、暗くとげとげした人の肖像などがある。

無論、中には實際拙（まつ）いのもあるには相違ないが、然し素人が考へるやうにどれも之れもさう拙いのではない。抑も二科會といふ名稱が出たのは、文部省展覽會の日本畫には第一科第二科があつて、審査員の頭の陳と新とに依つて分けてある。洋畫とても既に流行久しく、畫人の頭に新舊があるに相違ないから、こゝにも兩科を分けてくれと文部省に請願し、その聽かれざるや連袂之より離れて一種の反抗展覽會を興したわけである。それから見ても、是等の一見素朴拙劣に見える作品の裡に何等かの意味がなければならぬと云ふことを考へしめられるのである。

繪畫其他の藝術を人間の藝術的産生物だとして、それだけ獨立させて見る觀方はまだ淺い。畫面

を見てそれに同化する時には觀者と作品と作家とは三體合一のものにならなければならない。然らば卽ち畫面は靜止の物質ではなくして、髣髴として全人の相となるのである。

今や藝術の世界に於ては、主觀と客觀との爭ひは漸く鎭靜に歸し、藝術を樂むと云ふことは、藝術作品の現はす第二次的の假象の形體世界に同感するといふことではなく、直接に人間を愛するといふことに他ならぬ樣になつた。

忠實に自然を再現するといふ點から行けば、佛蘭西十八世紀の自然主義畫派乃至以太利亞の十五世紀畫派は今人より一層善く成功して居る。またマネエ一派の印象派はセザンヌ、ゴオホまたザアク(Eugène Zak)の徒より更に實物らしい。

自然は常に我々の周圍にある。それをそのまゝ再現する必要が何處にあるか。それが必要ならば寫眞の力を借りるが可い。

畢竟藝術享樂の眞味は相を筆墨形象に變へたる人間そのものを感覺し、享樂する所にある。

既に人間そのものを享樂する以上は唯觀察の精緻、手腕の圓滑のみを喜んではならぬ。何者ば人間は單に觀察のみではないからである。手腕のみでないからである。同樣に色彩、情趣、調子等のみを以て繪畫批評の標準としてはならない。夫れ辯舌は人間の思想、感情の表現手段である。而も一方にはまた訥辯の能辯といふが如きパラドキシカルの言葉がある。誠意を藏し、全人格的情熱を

包むの訥辯は華あつて實なきの辯舌に勝るのである。

之を歐洲の繪畫史に見るに、十九世紀は實に繪畫の最も能辯なりし時代に屬してゐる。宜なり、今日之に對する反動の起れるや。乃ち畫人は折角習得したる畫術を捨て、練磨を捨て、却つて無知なる人の畫く所に係る民族的繪馬繪に習ひ、以て自家の全人的表現を求めんと欲した。而して自ら稱して原始派、或は野蠻派となしたのである。

彼等は技術の美衣を以て自己を飾るよりも、美醜共に存する自己を表現せむと欲した。が然しやがてそれが衒ひともなり、コンヴエンシヨンともなつた。恰も高等學校生徒の弊衣破帽の如く又は三宅雪嶺博士の訥辯の如く、やがてそれが(善意に於て)職業的のものとなつたのである。

今日二科會のうちには一見極めて拙劣な畫がある。如何に凡人と雖も、相當の修業を積めば、素人が見て美しいと思ふぐらゐの繪の畫けない筈はない。彼等の之を捨てゝ、却つて幼稚拙劣に近き繪を畫くのは、畢竟彼等の表現に疑があり、革命があつた上のことゝ思はなくてはならぬ。是の如きは專門家に向つては分り切つたことであるが、一般觀客も亦之れだけは新畫鑑賞の常識として豫備しなくてはならぬ。そしてそんな原始的外看の間に眞僞を甄別しなくてはならぬ。

觀者は豫め日本の文人畫に就て考察を廻し然る後に此に臨めば、則ち解する所が多いことゝ思は

れる。

予は今、茲に十分の緒論を書く餘裕が無いから、直に陳列に係る個々の作品に就て批評しようと思ふ。

カタログがまだ出來て居なかつたから、能く分らなかつた會員の作品は後にして先會員の作品を見ると、石井柏亭氏は健穩であり、日本繪畫の趣味を洋畫を以て現はさうとして居る。そして畫趣はやゝ概念的であり、說明的である。繪畫上に曰ふ所の概念的または說明的といふ言葉はどう云ふ意味であるかと云ふに、例ば一作に「牧柵に凭るメノコ」といふのがある。まだ年齡の若いアイヌ種族の女が牧場の柵に凭つて惘然として前方を凝視してゐる圖であるが、女にしろ、柵にしろ、(極端に言へば)主として女、柵の類型を現はしたもので、必ずしも其特殊性ではない。女の皮膚も、柵の板も、時の朝暮に依り、季の春秋に從ひ、日の晴曇に順ひ、氣の乾濕に應じ、其色調、其硬度感を多少變ずるものである。全く等質ではない。現象は刻々の相であるから、一刻前のものは一刻後のものではない。而して昔日の印象主義者が偏に其變化の瞬間像を再現してまた現象派の目を得たのに比較すると、石井氏の方では、それら刻々の現象から永久不變の相を抽象して、更に一般化した所がある。卽ち石井氏自身は自家の主義を偶然趣味と稱して、偶然目下に橫はる事象を描くのだと云ふが、實は寧ろ(日本古來の畫人と同型に)理想派である。石井氏自ら云ふ偶然は實に「趣

味」であつて、偶〻アイヌの女の襟に縫はれたる草花の模樣に低徊するのである。「鰊倉」の遠見の海なども、海の感覺と云ふよりも寧ろ海の記號である。卽ちこの種の繪は、觀者は理知の目を以て之を見、身境中に座す感じの代りに、他の概念的聯想を喚起さるゝに依つて、其主觀中の一藝術境が發展するのである。かゝる享樂味は俳句などの如く假に之を知的聯想に依る統覺作用と云ふべきである。無論色彩の調和、運筆の勢等より來る美感も之を缺いてゐるわけではない。唯其主潮に就て名付けたのである。

石井氏に對して現象派たるべきものは、この會員中には之を見出すことは出來ない。何故と云ふに此派の人々は、多くは印象主義を直行して、後期の畫派（後期印象派以後）に共鳴するものであるからである。其うちでも印象派に近いものは山下新太郎氏の繪であるが、山下氏も其歸朝當時と今とは、大分畫趣を異にしてゐる。氏は印象派といふよりも色彩派と稱すべきである。其の「供物」と題する女の胸像の如きは濃碧、淡紅、薔薇紅、帶黃鈍綠鮮綠等の色絢爛の極みを盡して居り、頰邊の皮膚、毛髮、絹の衣等は甚だ柔き、やや柔き、最も柔き、或はやや硬きの、物質硬度交錯の興味を現はして居る。卽ち尙印象派の名殘を止めたる色彩趣味並に表面技巧である。「端午」の小兒は、またこの硬度感を、極めて快く描出したものであるが、其色彩の美を喜ぶの餘り「夕食

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

の支度」の如きは、やや俗趣味に近くの弊に陷る。

其色彩の華美なると、物質描寫の現象的なるとは、氏の畫が石井氏のものと甚だしき反襯をなす點であるが、石井氏の繪の多く概念的なるに對して、また絶好の對照となるものは、梅原良三郎氏の感覺本位の繪である。

梅原氏は、其作品の畫題の「坐裸婦」といふ言葉の口調の惡いのが證明してゐる程、日本趣味の少い畫家である。多く赤っぽい調子で(帶黃紅、帶赤綠、黃っぽい綠、赤みある褐色等)で恰好わるく腰掛た女を畫いて居るが、解剖學的體格は殆ど均齊を保つて居ない。あまりに大なる胸、あまりに短き下腿等は、普通の人の嗜好に媚びる形體ではない。而してさう云ふ方面は氏はまた殊更に之を閑却し、省略し、除外してゐるのである。然らば氏の求むるものは何であるかと云ふに、色彩の趣味は暫く措き、一種の表面の感じである。氏の作品を見た人で護謨毬を想起しないものは蓋し稀であらう。氏の繪には各種の彈力の感じが散在し、恰も鯰が地震となるやうに是が或は頰となり、髮となり、肉となり、脣となり、乳房となり、腰となつてゐる。同じやうな趣味が氏の師事したるルヌワアル翁にも存してゐるのである。而してこの圓味と彈性とに富んだる畫面の各要素は溫色の顏料と、一種粘い柔い筆觸と伴奏して、觀者の身心にまた一種の圓く、粘く、溫かい感覺世界を現出し、其身暖房の羽蒲團中に在るにあらずやと疑はしむるに至る。予は此種の畫趣を假に肉感

的聯想(色と云ふ字は支那に於ては元來形體或は廣義の感覺的快感の事であつた。後に專ら女色の事に取られるやうになつた。茲に肉感といふのも、新聞紙的の意味ではない。もつと廣義の積りであるが、官能的、感覺的といふ言葉よりも更に切實の感があるから今之を用ゐる。)と稱すべきである。

而してこゝにまた新しい問題が起る。梅原氏の作品は、元來我々が見慣れてゐる女人、或は繪畫の美とは餘程異なつて居て、其内から今迄の人が寧ろ閑却して居た屬性のみを取つて基調となし、殊更に之を誇張したといふ看があるが、かう云ふ美意識といふものが生ずるのもまた偶然的のものでないと云ふことである。此繪の暗示する所は軍國主義、ストイシズム、或は中世耶蘇教的嚴肅主義とは全く反對である。卽ちそれには特殊の背景——境遇——がなければならぬ。氏は久しく佛蘭西に在つたが、さう云ふ境遇にはまた獨特の文化がある。此に於て藝術觀賞者は文化史的研究の興味に引かれるのである。そしてまた其處に別の藝術鑒賞上のパアスペクチイヴが出現する。是れテエン氏風の文化史的藝術批評の興味である。予は今ここに於て此問題に觸れやうとはしない。唯暗示だけに止めて置くのである。人各々十九世紀繪畫史に就て之を究むべきである。

梅原氏の作品に隣接して有嶋生馬氏の二つの裸體習作がある。一つは胸から脚まで、一つは頭か

ら胴までの女體を寫生したものであるが、此に現はるゝ所と普通我々が見て美しとなし、心引かるゝ所には非常な徑庭があるのを感ずる。抑も畫家彫刻家が、好んで未成の習作を畫き、完全ならざる人體を刻む所以は、世人が到底纏まつた美觀と考へることの出來ない一本の手足、一個の胴體にも亦能く「死んだ全體」に勝る「生きた部分」を現はすことが出來るからである。謂はゞ一種の氣取りである。有嶋氏は元來不器用な畫家であるが、それにしても歸朝當時は物質の色彩、其外看の美を主調とした印象派風の畫を將來した。然るに今やこの第二の作「今年の習作」に於ては女體の隆起、陷沒の肉面を單化し且高調して普通人の目には寧ろ快からざる形相を故更に描出して居るかの看がある。それで居ながら其色相を現はすが爲めには、やはり一種の印象畫風の技巧を以てして相當の苦心をしてゐるのである。此に於て看客は次の事實を覺ることが出來る。卽ち有嶋氏は頭の人であるから早くも畫界の風潮に感じて、其作畫の面にはより多く自家主觀の影を容れむとしたのだ。それは復興期前派またグレコ、セザンヌ、マレエ等に貫流する一種觀念派的の樣式化である。

是事は婦女肉體の凸凹面の誇張が證明する。而も一方には尙ほ十九世紀の現象的外看に重きを置くの畫風に戀々たるものがあつて、此二ツの相反の傾向が其畫の統一を曖昧にして居るのである。無論有嶋氏の此二作の如き之を技術の方面より觀れば寧ろ拙作に屬するものであるが、其裡尙近時

思想界の二潮流を暗示し、其畫面は作者思想の煩悶則ち葛藤の反映なるを知るに至れば、卽ち此未完の拙作も尙能く幾許の人間味を現はし來るのである。

物質の現象的外看に重きを置いた印象畫風に對して今や一種の反動の起りつゝある事は既に述ぶる所に依つて、やゝ解釋せられたものと思ふが、その著しい傾向には二通りある。一つはセザンヌに發したる潮流であつて非情の物質に、或種の眞面目な、重々しい、その癖明さ、やさしさのある人格味を見出さうとするものであるが、其行き方は漸くコンエンションとなり、趣味となり、其裝飾的美感となつた。この會に於ては安井氏、正宗氏の作品の或るものが之を代表して居り、また山崎福之助氏の靜物に其誇張を見る。も一つの傾向はもつとくすんだもので、幾分宗教的趣味を加へたる觀念主義の傾向である。エル・グレコとかハンス・フオン・マレエとか、フエルヂナンド・ホドラアとかに見るやうな畫趣であつてまだ畫術が幼稚で、色彩に對する觀念が乏しく、調はない體形を以てして、而も能く宗教的敬虔の心を發表する人物を畫いたる古のジオツトオまた獨逸中世の藝術の再現かと思はれる代物である。日本では岸田劉生氏、木村莊八氏等が行ひ、前述有嶋氏の作品にも其片影を見出すが其亞流の徒亦此會に少くない。例へば保田龍門氏の「老婦」「母と子」「自畫像」、中川一政氏の「幼兒」「春光」「弟に與ふる自畫像」の如きは此種のものに屬し色は態と碧、褐、灰、黑等の印象派以前の好みを取り、陰翳を深くし、畫調を暗黑にし、人間の顏には古の刑罰

圖中の殉教者に見るが如き苦悶の相を現はしてゐる。其風景に現はれたるは硲伊之助氏の「崖」であつて、是には十年二十年前の油畫に見るが如き素朴な寫實を見るが、而も其間故更にさうしたらしい衒があつて、一種の不快を催さしめる。西村伊作氏の「加藤氏の肖像」の如きも亦この一類に近きものであつて、額の靜脈の怒漲などに故更に精密の筆を用ゐ、一種素朴にして嚴肅なる情調を描かうとしながら幄幕の模樣などにあく拔けのせぬ寫實を見せて、其觀相の不純なるを示して居る。凡そ此種の風潮は一畫人の發育上の或經過に現はれたる一傾向に倣ひ、之をコンエンションとしたものであつて、彼の樹木の瘤、人間の癌腫の如きと同然、寧ろ病理的現象と見做し之に僞原始派、歪形家、後退派の名目を與へて排斥すべきである。

安井氏の作品の事は後で云ふことにして、正宗得三郎氏が最近歐洲から寄越した四面の繪を見よう。正宗氏は舊は冷い色彩の原色の點で點彩家風の繪をかく人であつた。今や漸くその調子は明るくなつて、個々の細目の興味を捨てゝ塊の感じを掴む人となつた。安井氏の近年の作と同じやうに、セザンヌから出發した物質味を、趣味の上から取り入れたやうな畫品である。セザンヌも既にさうであつたが、その亞流は物質の輕い、模糊浮動するやうな調子を好まないで、凡て重くしつとりとした性質を喜んだ。正宗氏の「靜物」中の花なども、印象派のものゝやうに氣氛的ではなくつ

て、重い水銀の露でも附けたやうにどつしりとして居る。予が今どつしりとか、しつとりとか、他愛もないやうな文字を用ゐて、偏に繪畫の感覺味を論らつて居るのを見て、馬鹿らしく思はれる讀者もあるかも知れない。然し實際はそれが繪畫の本能で、そんな感覺に抽象されたる、人間の部分的個性が、尙ほ能く髣髴として全人格の味ひを暗示する所に價打があるのである。南宋畫などの如きも、筆墨のさう云つた味ひを哲學化して、それが幾代か續いていやに有り難い樣なものになつたのに過ぎない。洋畫のさう云ふ傾向を小やかましく、哲學的、美學的、または文化史的に說明した論も少くはないのである。

唯正宗氏のはさう云ふ境地に多く趣味から入つて居る、がまだ全人的の燃燒融會がないから模倣臭いのである。

趣味と云へば小杉未醒氏も亦趣味の人である、決して技術の人ではない。近頃漸く旗色の鮮明になつた氏の畫風は實に好趣味の典型である。「水村の母子」といふ油繪などは、一種の柔かい、目の荒いカンワスの上に、繪具は十分で而かもかするやうな筆致を以て、細かくざらざらした表面を造り出して居る。こんなざらざらした感じなども、また近世の精練された趣味から出たもので、女の顏などでも、素人は滑つこい、てらてらしたやうなのを好むが常であるが、そんなものは十六七世紀に疾うに廢つてしまつて今はこんなざらざらが喜ばれるのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.